



## 2019年国公立大学入試【国語】



2019年大学入学試験も終わりを迎つつあります。そこで、国公立大学の国語の問題で出題された現代文の本文についてまとめてみました。

2019年 主な国公立大学二次試験 現代文出典一覧 (抜粋)

右端は字数です (桐原書店調べ)

北海道大学	食べることの哲学	檜垣立哉	3300
北海道大学	文学のなかの科学 なぜ飛行機は「僕」の頭の上を通ったのか	千葉俊二	3200
東北大学	音・時・言葉	岩田慶治	2050
東北大学	ことり	小川洋子	3200
東京大学	科学と非科学のはざま	中屋敷均	3500
東京大学	ヌガー	是枝裕和	1790
名古屋大学	ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと	奥野克巳	4300
京都大学	科学思想史の哲学	金森修	2400
京都大学	詩の誕生	大岡信・谷川俊太郎	3100
京都大学	音を言葉でおきかえること	吉田秀和	1900
大阪大学	パスカル『パンセ』を楽しむ	山上浩嗣	2120
大阪大学	長い道	柏原兵三	3920
大阪大学	日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で	水村美苗	5370
大阪大学	科学者が人間であること	中村桂子	4090
広島大学	保守の真髄	西部邁	2900
広島大学	海の庭	山田詠美	3600
広島大学	叱る方も叱られる方も思わず笑ってしまうというのにどうやら効果的な叱り方	米原万里	2170
九州大学	人が人に教えるとは	上田薫	3200
九州大学	〈私〉の存在の比類なさ	永井均	3510

今年の国公立の二次試験で出題された現代文は、全体に哲学・思想系の文章が多く、字数も平均で3000字前後で、これまでの傾向と大きな差はありませんでした。ただ、京都大学で大岡信と谷川俊太郎の対談が出題されたことには注目したいと思います。これは、2021年から始まる「大学入学共通テスト」を含めたいわゆる新入試で、国公立二次試験にも変化があることを予感させます。

「大学入学共通テスト」のプレテストでは、従来の単一テキストだけでなく、複数のテキストを並べた本文が見られました。また、評論や小説ではなく、法令文やアンケート、ポスターなど、実生活・実社会を旨としたテキストが出題されるなど、「大学入学共通テスト」では出題される本文自体に大きな変化があることが予想できます。今年の東京都立高校選抜問題【共通問題】でも、白洲正子と大岡信の対談が出題されました。こうした変化から、単に今後は対談形式も出題されるということだけではなく、これまでの本文の枠外から出題の可能性がある、ということが考えられるのではないのでしょうか。

今後はこれまでの枠組みにとらわれず、様々な形式の文章を読み慣れていくことが必要になると思われます。



# 英文校閲者のひとりごと 15

桐原書店の英文校閲担当者（アメリカ出身、在日歴長め）が日本で感じたちょっとしたことをつぶやきます。



## Old Movies in a New Light

There are some American films that appear on Japanese cable TV which I have not seen since my childhood. A second viewing after so many years often holds surprises. The movies of course have not changed; I have. Recently I “re-watched” a 1978 romantic comedy set in San Francisco. One thing that surprised me about the film was the fact that nobody was using a cellphone; they weren’t available to most people for practical use. People relied on public pay phones much more than they do today. Similarly, if you view the original “Mission: Impossible” (1996) now, you might smile when you see Tom Cruise flaunting an “M.O.” (Magneto Optical) disk—obsolete storage media which at the time was state of the art. As technology advances, we find even futuristic science-fiction movies like the original “Blade Runner” and “Alien” lagging behind our times—the round and bulky CRT displays we see can’t disguise their 1980s origin. The films that seem to stand the test of time are historical epics such as “Amadeus” and “Lawrence of Arabia”. They were meant to depict a distant past from the outset, so they are in a sense timeless, much more so than a film showing modern-day life in the 1990s. All movies, however, by intention or not, eventually become time machines. We can travel back to our youth and visit a world which no longer exists.



筆者によるイラスト

## 日本語訳

## 新たな目で古い映画を見る

私が子どものころに一度だけ見たことのあるアメリカの映画が、日本のケーブルテレビでときどき放映されます。何年も経ってから再び鑑賞してみると、驚かされることがよくあります。もちろん、映画自体は変わっていません。変わったのは私のほうです。最近、サンフランシスコを舞台にして1978年に制作されたロマンチックコメディを「見直す」機会がありました。この映画で私が驚いたのは、誰も携帯電話を使っていないことです。実用的なレベルの携帯は、ほとんどの人にはまだ手に入らなかったのです。人は今よりもずっと公衆電話に頼っていました。同様に、『ミッション：インポッシブル (Mission: Impossible)』(1996)の第一作を今見ると、トム・クルーズがMO (Magneto Optical) ディスクという、当時としては最先端の技術ですがすでに旧式の記憶媒体を得々と見せびらかしている姿に、つい笑ってしまうかもしれません。技術が進歩するにつれて、第一作目の『ブレードランナー (Blade Runner)』や『エイリアン (Alien)』のような、未来を描いたSF映画でさえも時代遅れに見えてしまいます。そうした映画で私たちが目にする丸みのある大きなブラウン管のモニターは、映画が1980年代のものであることを、まざまざと示しています。時の試練に耐えていると思える映画は、『アマデウス (Amadeus)』や『アラビアのロレンス (Lawrence of Arabia)』などの歴史物の大作です。どちらも、遠い過去の出来事を描くことを最初から意図していたので、ある意味、1990年代頃の現代生活を描いた映画よりも、はるかに時代を超越したものとなっています。しかし、そうした意図の有無にかかわらず、どの映画も結局のところタイムマシンとなるのです。なぜなら、私たちは青春時代に戻り、もう存在しない世界を訪ねることができるからです。

